日本キリスト教会　広島長東教会だより

ミニバラ No.10

〒731-0135　広島市安佐南区長東 3-32-16　tel／fax082-238-3459

2005 月 10 月発行

変わるペトロ、変わらぬイエス

「大祭司の僕の一人で、ペトロに片方の耳を切り落とされた人の身内の者が言った。『園であの男と一緒にいるのを、わたしに見られたではないか。』ペトロは、再び打ち消した。するとすぐ、鶏が鳴いた。」
（ヨハネによる福音書１８章２６～２７節）

ペトロが三度、イエスを知らないと否認した記事は、どの福音書にも出ていますが、その書き方には少しずつ違いがあります。違いに関して、ヨハネによる福音書の際立っている点は、ペトロの否認の場面を第一回目と第二・第三回目の二つに分けて、此れを、アンナスによるイエスの尋問の場面と交互に登場させ、二つのことが同時進行していたことを、読者に気づかせるような書き方をしていることです。恐らくヨハネは、イエスとペトロの違いを際立たせるために、こうした書き方をしたのでしょう。

アンナスは、元大祭司であって、現役の大祭司ではなかったのですが、尚隠然たる勢力を誇り、最高権力者然として、振舞っていました。しかし、どんな権力者を前にしても、イエスの態度はいささかも変わりません。捕えられ、縛られ、尋問され、殴打され、最早完全に生殺与奪の権を握られていても、イエスの心は微動だにしません。「きのうも今日も、また永遠に変わることのない方」（ヘブライ１３：８）、と言われるイエスの姿が、此処でも浮き彫りにされます。

此れと対照的なのは、ペトロです。イエスが尋問を受けるため、アンナスの屋敷の中庭に連れて行かれたとき、ペトロは、最初は門の外に立っていました。何の関係もない人間が、容易く入れる場所ではなかったからです。ところが、イエスの弟子の一人で、大祭司の知り合いの者が、その家の者と掛け合って、ペトロを屋敷の中に入れてくれました。思い掛けず屋敷に入れたペトロは、突然訪れた幸運を、一瞬喜んだことでしょう。ところが次の瞬間、門番の女中に、「あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか」、と問い質され、咄嗟に、「違う」、と言ってしまうのです。不意を突かれたため、心の備えがなく、思わず、「違う」、と言ってしまったのかも知れません。ところが、一遍「違う」、と言ってしまうと、中々訂正がきかなくなるのです。

最後の晩餐の席で、ペトロはイエスに対して、「あなたのためなら命を捨てます」（１３：３７）、と言いました。その言葉に偽りはなかったでしょう。しかし、悪魔は巧妙です。まさかと思われる所で、まさかと思われる人物、門番の女中を使って、不意を突き、ペトロに罠をかけるのです。一度、「違う」、と言ってしまうと、もう引っ込みがつきません。最初は小さな雪球が、転がって行くうちに、やがて大きな雪崩を引き起こすように、ペトロの否認も、最初は小さな一言から始まったのです。しかしそれが、最後は、「園であの男と一緒にいるのを、わたしに見られたではないか」、と動かぬ証拠を突きつけられても、まだ、「違う」、と言い張るに至るのです。こんなペトロを誰が一体想像したでしょうか。誰よりも、ペトロ自身が想像出来なかったでしょう。ところがイエスは、そのすべてを最初から予知しておられたのです。ペトロが勇ましくも、「あなたのためなら命を捨てます」、と言い出したとき、イエスは冷静に此れを受け止め、「はっきり言っておく。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」（１３：３８）、と言い返されました。そしてすべては、イエスが言われた通りになって行ったのです。

ペトロは私たちの姿そのものです。しかし変わるペトロの直ぐ横に、変わらぬイエスがおられます。「わたしたちが誠実でなくても、キリストは常に真実であられます」（Ⅱテモテ２：１３）。このキリストの真実が、私たちの危なっかしい信仰をも、最後の日まで支え続けてくださるのです。

牧師　三輪恭嗣

（２００５年９月１８日の礼拝説教より）